

二〇一五年四月二八日(平安神宮参加者一六名)

万葉の歌碑を綴りし若葉径	わかば
参道の天蓋となる懸り藤	わかば
神の杜肩にしきりの春落葉	わかば
沢水に屑流れ行く藤の園	わかば
陽を閉ざす大樹の杜の著莪浄土	わかば
十重二十重みかさの山に藤懸る	菜々々
澄む池に丹塗の影や浮舞台	菜々々
鳴尾高き老舗料亭桐の花	菜々々
大前に瑠璃ひき流し蜥蜴過ぐ	菜々々
遥拝す山藤匂ふ回廊に	ひかり
行厨によき緑陰を得たりけり	ひかり
稜線の膨らむ如く山笑ふ	ひかり
傾ぎたつ春日燈籠苔の花	ひかり
飛火野にはじける声は遠足子	満天
懸り藤池に映りし浮舞台	満天
砂づりの藤のしづくを掌に	満天
満開の藤の香に酔ひ人に酔ひ	よう子
倒木に宿りて芽ぐむ若木かな	よう子

池の面の青天井に懸り藤	よう子
藤匂ふ径花虻のホバリング	せいじ
神杉の杜の中なる藤の園	せいじ
藤の香を身に纏ひつつ園巡る	せいじ
譲りあふ歩板の狭し花菖蒲	有香
風倒木洞に宿りて著莪白し	有香
飛火野や指呼の彼方に懸り藤	うつぎ
鹿子の脚心もとなき木の根道	うつぎ
春の蝶万葉園に来て遊ぶ	よし子
後殿なる磐座や藤の山	つくし
懸り藤春日大社の裏山に	ぼんこ

吟行句会みのる選

二〇一五年四月二八日(平安神宮参加者一六名)